

内閣文庫蔵『系図

小笠原源六家

』所収「平家之系図」・「清和源氏御系図」について

佐々木 紀 一

はじめに

筆者はこれまで、平家一門の考証に新訂増補国史大系『尊卑分脈』以外の中世成立古系図を利用し⁽¹⁾、また特に清和源氏系図についてその成立と史料的价值について論じて来た⁽²⁾。後者では現在汎用される大系本『尊卑分脈』所収の系図の書写が戦国時代まで下がり、歴史的に無視できない胡乱な改変の有る事を指摘し(拙稿⁽¹²⁾)、同時に大系本よりも収載・記事が少ないが、大系本近似の清和源氏系図が室町時代に存在する事(拙稿⁽⁷⁾・⁽¹³⁾・⁽²¹⁾)、特に簡略系図の存在を指摘してきた(拙稿⁽¹⁹⁾)。本稿では新たに標記の系図から、平家一門の考証と、清和源氏系図の成立と展開について考察するものである。

一、小笠原源六家について

同系図一冊は、外題「系図 小笠原源六家」とある近世中期頃書写の一筆の系図集であり、現在の所、電子公開に拠る。即ち以下の八種より成る(内題が無い五・七の◇は仮題である)。

一、「清和源氏系図」(清和天皇より各流)

二、「平家之系図」(桓武天皇より清盛流平家)

三、「清和源氏小笠原系図」(清和天皇より京小笠原流〔植清まで〕・仏

地院流・源六流)

四、「小笠原備州兄弟系図」(清和天皇より京小笠原流〔政清まで〕・仏地院流)

五、「〔小笠原系図〕」(清和天皇より京小笠原流〔植清まで〕・仏地院流・源六流〔康広まで〕)

六、「〔小笠原系図〕」(清和天皇より京小笠原流・仏地院流・源六流〔康広まで〕)

七、「〔小笠原系図〕」(小笠原長高より尚清まで)

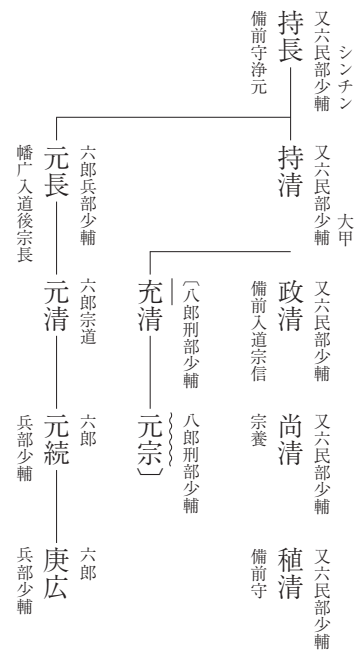
八、「姓源 小笠原氏」(元統より長房⁽¹⁸⁾まで)

系図三以下は、鎌倉時代以来繁茂した小笠原氏各流は載せず、京小笠原氏と、そこから派生した源六家の系図である。系図八は(略記)、

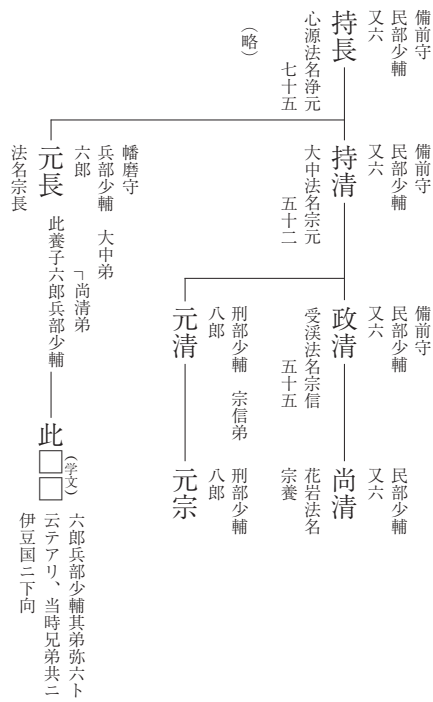
元統——康広——長房——長房⁽¹⁸⁾
六郎 市左衛門尉 源六郎
縫殿助

と続く家譜であるが、系図三及び『寛永諸家系図伝』⁽³⁾を見るに、最後の人物は長真の誤り。元統は系図五(・六)に拠れば、小笠原氏の京家の支流の出である⁽⁴⁾。

(系図五)



とあり、特に尚清弟の六郎兵部少輔（法名宗雪）^⑥が、元統の父とある点とあり、三三七と異なり、伊豆下向の六郎兵部少輔と弥六の兄弟が見える。下山氏著の「小笠原元統」・「康広」には、北条氏家臣としての事績が挙げられ、「箱根神社文書」「細川道永書状」（大永七年〔二五二七〕カ十月五日）^⑦



に、細川高国より箱根別当へ遣はした使者「小笠原兵部」が元統とされる。これは系図八に、元統は足利義澄に仕へた後、甥に当たる北条氏綱を頼り、小田原に下向したとある事と符合する。その後、天文八年（一五三九）に氏は氏綱の元に居り（8）、その子康広も同家家臣で、小田原開城後も北条氏直に随従し、その死去の後、文祿元年（一五九二）、家康に仕へた（下山氏著）。

以降、子孫は旗本としての事跡が確認出来るが(9)、系図八の識語に、

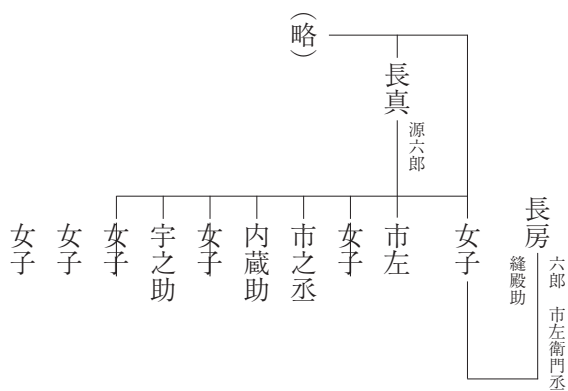
小笠原源六郎

寛永十九年^午正月正月廿日

長真

とあるから、寛永十八年二月に編纂が始まつた（『寛永諸家系図伝序』）『寛永諸家系図伝』の提出家譜の案文であると考へられる。また系図三では、長真の子女が最終人物であるが、

(系図二)

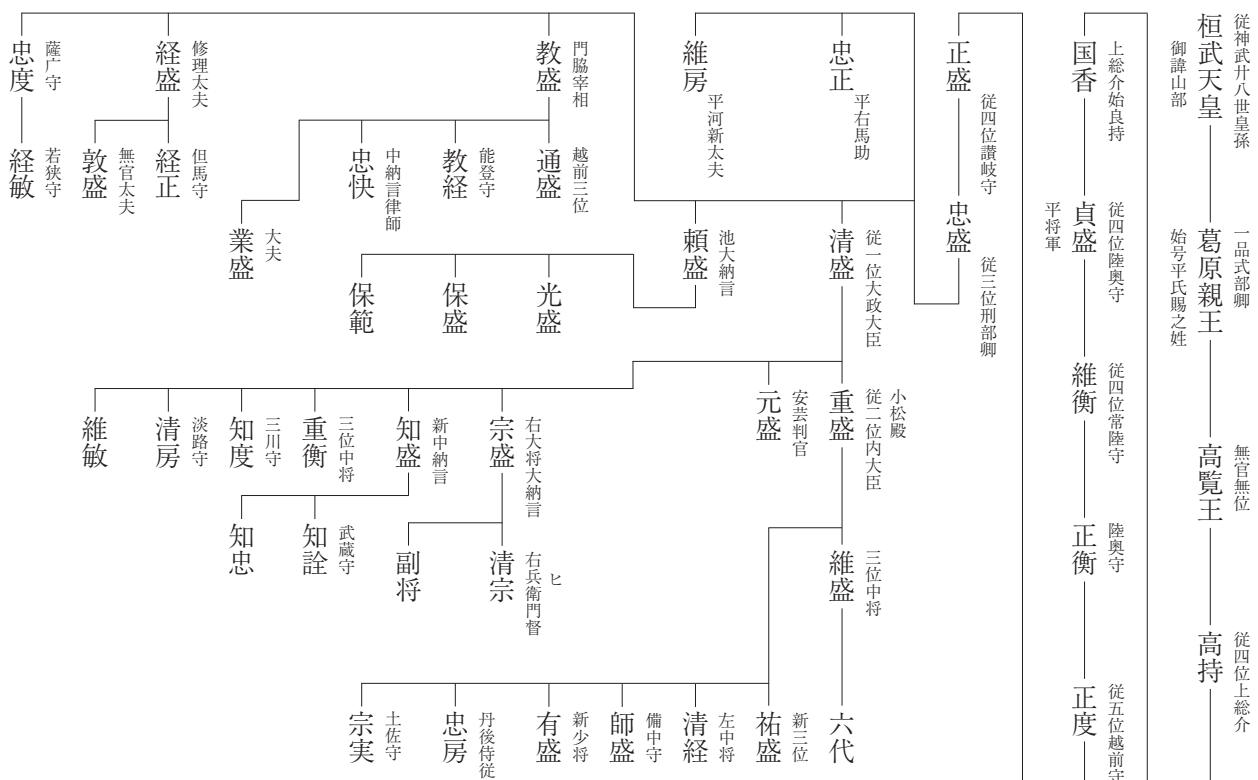


と、子女が仮名で、『寛政重修諸家譜』一九三「小笠原」と一致が確認できるのは、市之丞持真のみである。『寛政重修諸家譜』に拠れば、長房は寛永二十年（一六四三）十二月致仕し、源六郎長真が継ぎ、同人は寛文二年（一六六二）六月没。持真は万治三年（一六六〇）に御目見えし、寛文二年六月父の後を継ぐとある。さうすると三は、寛文二年以前、長真家での成立にならう。一連の小笠原系図も源六長真家で作成、または集積されたと考へられる。一・二も同様の伝来を経た可能性があるが、それ以上の伝来過程は不明である。

以上の源六家系図は、『尊卑』・『諸家系図纂』所収の各種小笠原氏系図⁽¹⁰⁾・『笠系大成』⁽¹¹⁾と一致しない。ただ管見では、書陵部蔵松岡本『小笠原系図京家』一冊⁽¹²⁾の接続（特に長政・長高に付せられた「一書」・構成は五・六とはほぼ同じで、源六流に接続し、五・六は康広に留まるが、江戸後期の持齢に至る。元統と長房に詳細な脇書があるが、系図八よりも『寛永諸家系図伝』の脇書の方に近く、直接、問題の源六本小笠原系図集を利用したか不明である。

二、「平家之系図」について

源六家の伝来・収集になるかは確定出来ないとして、本稿で問題にしたのは、一・二の系図である。二の「平家之系図」は、桓武天皇より清盛流の平家系図で、正盛まで単系の嫡流系図である。女子の掲載はない。忠度の子に若狭守経敏を釣る所等、接続を誤る所の有る事からすると、先行系図が存在したと見てよい。また脇書を見るに極官位では無く、『平家物語』の（最終的）呼称に一致する⁽¹³⁾。



所が池家の男子は、十二巻本の『平家』には登場せず、保盛・光盛は延慶本三末「頼盛道ヨリ返給事」・四「平家一類百八十余人解官セラル、事」⁽¹⁴⁾・長門本巻十四「池大納言都留給事」⁽¹⁵⁾に見えるだけである。保範が保盛子で、承久の乱の際、自害した保教⁽¹⁶⁾とすると、『平家』の物語世界とは重ならない人物である。また清盛の末子に吊られる「維敏」も実在は確認出来⁽¹⁷⁾、『尊卑』・延慶本付載系図・『野辺文書』所収、応安八年写の「平氏系図」⁽¹⁸⁾・文禄本『平家』巻十二附載系図⁽¹⁹⁾・『塵荊鈔』九「平氏之事」⁽²⁰⁾・『須磨寺笛之遺記』⁽²¹⁾に掲載されるが、経歴は不明で、『平家』には見えない人物である。

歴史系図が『平家』に附載される例は、延慶本・文禄本に見えるが、以上からすると、本系図は同様の歴史的な平家系図を『平家物語』の呼称に対応させて、改変したものであらう。また源六本同様、物語の呼称が採用されるのは、『野辺』二二「平氏系図」で、そこに、

(『野辺』二二)

桓武第五王子「品式部卿平ノ性ヲ給ル

五十代
桓武天皇——葛原親王——商望——国香——(略)

と、葛原親王の賜平姓記事が共通するが、目下、その他の点で一致する平家系図は見当たらない。また古記録・他系図に見えない平河新大夫維房は、来歴不明である。

接続の誤りも多く、忠盛の極位の如く不正確な記事が有り、歴史史料としての価値は低いが、問題とし得るのは重盛息の師盛の位置である。覚一本巻九「一の谷落足」に、元暦元年(一一八四)二月の一の谷の合戦で、師盛が戦死した時、「小松殿の末子」として、「生年十四歳とぞ聞えし」(高野本)⁽²²⁾とある。正宗寺本『諸家系図』に師盛を最末に吊り、「十四才」とするのも享年十四才説を承けるものであらう⁽²³⁾。覚一本巻七「維盛都落」では、

御弟新三位中将資盛・左中将清経・同少将有盛・丹後侍従忠房・備中守師盛兄弟五騎

と見え、『源平盛衰記』巻三十一「維盛惜妻子遺」で、

新三位中将資盛・左中将清経・左少将有盛・侍従忠房・兼盛・備中守師盛、五六人ノ弟達⁽²⁴⁾

と列挙するのも、兄弟中、年若の扱ひと考へられる。しかし十四才での参戦は些か早過ぎないか。

『尊卑』他の系図では⁽²⁵⁾、

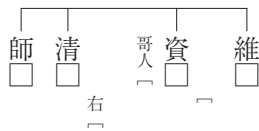
維盛・資盛・清経・有盛・□・師盛・忠房・宗実

の順であり、四部合戦状本『平家』巻九「師盛最期」でも「小松殿五男備中守師盛云生年十六歳」とある⁽²⁶⁾。

対して『野辺』二二では⁽²⁷⁾、

維盛・資盛・清経・有盛・忠房・師盛・□・宗実

の掲載順で、覚一本に同じ。『法然上人伝記』(九巻伝)三下「聖光上人事」にも師盛を「六男」とする⁽²⁸⁾。これからすると源六本の師盛の位置は単純な誤りの如くであるが、室町時代中期書写の入来院本『平氏系図』では⁽²⁹⁾、



と、清経の次に師盛が来る。但し入来院本が他の兄弟を省略した可能性が考慮されるが、平氏系図を文章化した『塵荊鈔』九「平氏之事」でも、

小松内府ノ子息、三位ノ中将維盛、新三位ノ中将資盛、左中将清経、備中守師盛、新小将有盛、丹後侍従忠房、土佐守宗実等也⁽³⁰⁾

とあり、師盛以下に番号が付されるのは、兄弟順を訂正する意で、依拠した系図は師盛の位置が源六本と同じで、清経の次であつたと考へられる。

現存の古記録からすると、源六本・『塵荆鈔』依拠系図の兄弟順に妥当性が有ると考へられる。全ての系図で三男の位置に置かれる清経は、母が家成女子の「当腹」⁽³⁰⁾である。その官位歴を見るに、仁安元年（一二六六）十一月に従五位上に叙⁽³¹⁾、翌年正月には正五位下⁽³²⁾、同三年十月に侍従⁽³³⁾、安元元年（一一七五）九月には左近衛権少将⁽³⁴⁾、治承二年（一一七八）十二月十五日以前に従四位下に叙せられてゐたが⁽³⁵⁾、二十二日に従四位上⁽³⁶⁾に昇位、同三年六月に中将⁽³⁷⁾で、寿永二年（一一八三）四月には「左近衛権中将」⁽³⁸⁾。系図に拠れば極位は正四位下である⁽³⁹⁾。

次に有盛の叙爵は安元元年十二月で⁽⁴⁰⁾、治承二年正月に正五位下に叙せられるが、その間、侍従に任官し⁽⁴¹⁾、養和元年（一一八一）四月に昇殿⁽⁴²⁾、十二月には依然五位⁽⁴³⁾、同二年以前に左少将で⁽⁴⁴⁾、系図に拠れば極位は従四位下⁽⁴⁵⁾。この二人は京官のみを経歴とする。

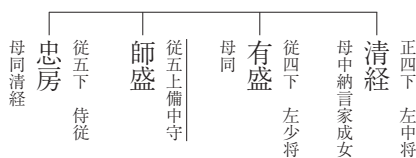
対して師盛は、承安三年（一一七三）十二月の除目に、景盛と交代して丹後守^{（46）}に任ぜられてゐる。以降、安元元年十一月の勸賞に「丹後守従五位上」^{（47）}、治承二年正月に「若狭守従五位下」^{（48）}と見える。『尊卑』にも極位が従五位下とあるが、『古系図集』・文禄本系図は「従五上」だから、『玉葉』が誤りの可能性もあるか。極官は「備中守」^{（49）}である。

忠房は安元二年（一一七六）正月に従五位下能登守^{（50）}と見え、寿永二年七月以前に侍従^{（51）}に任ぜられ、系図に拠れば極位は従五位下とあるから（『古系図集』・『尊卑』）、師盛は少なく共、有盛・忠房よりも官職に就く時期が早い事になる。

元暦元年二月に一の谷で討たれた師盛の享年は『平家』諸本で区々で前掲の如く覚一本は十四歳、四部本・文禄本は十六才、百二十句本は十七才、南都本が十八歳⁽⁵²⁾とする。然るに『尊卑』に吊られるその子源智が、寿永二年の誕生とすると⁽⁵³⁾、享年十四歳説には無理があるとの指摘が早

くに宗門の研究にあり（54）、前掲の古記録から、享年は二十歳を超えてゐたとの推定がなされる（55）。

有盛・忠房両兄弟の生年は不明であるが、師盛が同母の弟とすると、年齢的に矛盾する可能性が高い。確かに師盛の母を清経等と同じとするのが、延慶本系図・野辺二〇系図の古系図で、谷森本『尊卑』の追筆にもその旨の注記があるが⁽⁵⁶⁾、『尊卑』の室町末期写の菊亭本⁽⁵⁷⁾・広橋本⁽⁵⁸⁾・吉田本⁽⁵⁹⁾には、清経以下の男子に母の記載自体がなく、谷森本の後補の記事と考へられる。また『古系図集』⁽⁶⁰⁾では、



と師盛に母の注記が無い。これも単純に脱落した可能性を完全に否定できないか。

しかし次の『定能卿記』（安元御賀記）⁶¹から師盛母が清経と異なると確認出来る。師盛の後白河院五十御賀参仕は藤原定家写『安元御賀記』⁶²にも見えるが、『定能卿記』安元二年二月二十四日条の記事に、

今日、成親卿母堂死去了、実教朝臣同母也、仍舞人事有其沙汰、被申殿下云々

と⁽⁶³⁾、清経の外祖母藤原経忠女⁽⁶⁴⁾の死亡が記され、二十五日条には、
雖雨止、成経・清経・成宗等除服之後、廿八日可被行云々

とあり、舞人を務める孫達が喪に服する事になるが、出参予定の二十八日の院の舞御覧の日も、

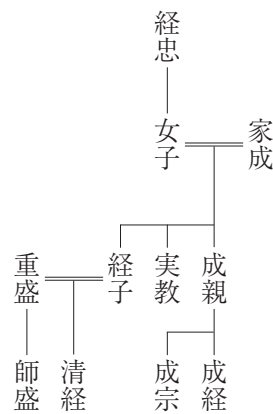
今日、猶服気舞人三人〔成経・成宗・清経〕未除服之間不参

とある一方、

今日、参楽人（中略）師盛

と、笙担当の師盛が参加する事を見るに、清経と同母で無いと解して良い。

（関係系図）



師盛の官が一貫して国司である事とも併せると、師盛は重盛の庶子であつたと考へられる。また治承四年の内乱以降、寿永二年の都落まで、小松家の公達で追討使に駆り出されるのは、維盛・資盛・清経⁽⁶⁵⁾であるが、都落直前に、

今日、新三位中将資盛卿、舍弟備中守師盛并筑前守定俊等家子相従、

資盛卿雑色懸宣旨於頭、相伴肥後守貞能、午剋許発向⁽⁶⁶⁾

とある事は、師盛が寿永二年には青年期に至つた事となり、少なくとも有盛よりも年長であつたと見るべきであらう。清経が「右大将四男」⁽⁶⁷⁾とされるのも、師盛と生年が近い為の混同である事を示すか。

師盛の母に注目すべき説がある。『玉桂寺阿弥陀如来立像胎内文書』⁽⁶⁸⁾

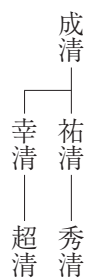
の「源智自筆願文」・「結縁交名状」に見える源智の親縁「秘妙房」は、石清水祠官の別当家紀氏の出で、秘妙母の「大夫殿」は別当成清（一一二二～一一九九）女子であつたと、田中恒道氏が指摘する⁽⁶⁹⁾。即ち「結縁交名

状」に見える、

法然房源空 真観房感西 勢観房源智 比丘尼秘妙 静妙（中略）

祐清 幸清 秘妙房母大夫殿 超清 シウ清

と大夫殿を挟むのが祠官家の人物で、系図は、



となる。大夫殿がこの誰の子かが不明であるが、秘妙は源智と同年代で、田中氏はその妻とする。対して伊藤唯真氏は姉妹とする⁽⁷⁰⁾。その場合、大夫殿は成清子で重盛妾師盛母となるから、先の師盛庶子説に合致するが、族人を網羅する傾向の有る一門系図の『石清水祠官系図』⁽⁷¹⁾の女子に該人が見えないから、これは決定し難い。

以上、源六本は、兄弟をより年齢順に挙げてゐた古い正確な形態を残す系図に依拠したものである。所が官位が清経・有盛より劣るため、南北朝期頃迄にはその弟と解され（『尊卑』）、兄弟同母説も生まれ、『平家』の各本が年若の年齢を区々按排して、明示したと推定される。

三 「清和源氏御系図」の成立下限

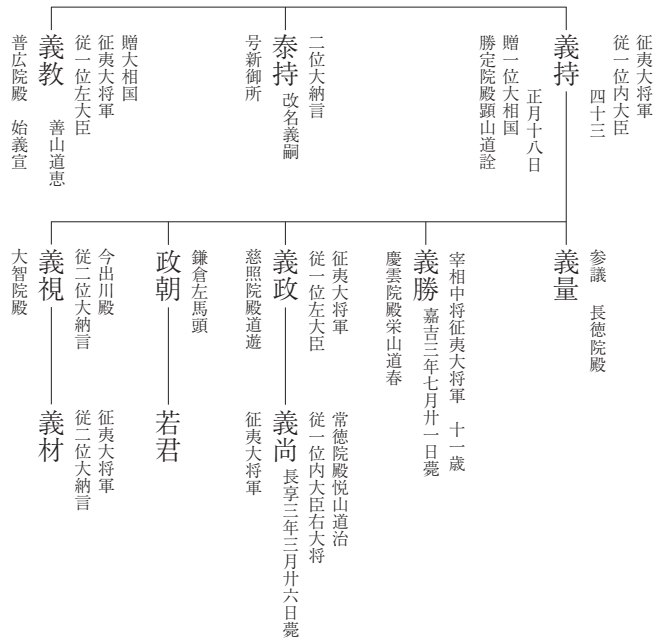
一の「清和源氏御系図」は、頼光流（頼政、土岐光衡）も若干載るが、主に頼義流の、鎌倉將軍家に至る義家・為義・義朝・頼朝の一族、武田義清子孫、義国流の新田流（新田・山名）・足利流より成る。特に山名氏・足利氏一族が室町時代の族人まで釣り、後者は京・関東公方他の主要な一族を載せるが、『尊卑』の如く、庶子一族を網羅するものではない。

源六本は満仲子として、源賢に相当する人物を、

多田法眼

之顕

とするが、「之」は「元」の誤りと考へられる。また後掲する様に、接続を誤る所が幾つかある事からすると、先行系図の存在が推定される。最終成立を室町時代の掲載人物から推定するに、①京公方では、接続に誤りがあるが、



とある。足利政知子の若君が明応二年（一四九三）四月に、還俗し義遇と名乗る事⁽⁷²⁾、義材が長享元年（一四八七）正月元服⁽⁷³⁾、同八月に左馬頭に任ぜられ、義材の諱が見える事⁽⁷⁴⁾、その後、延徳二年（一四九〇）正月襲職⁽⁷⁵⁾で、明応七年（一四九八）八月頃、義尹に改名する事⁽⁷⁶⁾、その父義親は延徳三年（一四九一）正月没の事⁽⁷⁷⁾からすると、端的に延徳三年（一四九一）正月以降、明応二年（一四九三）四月以前の書写と言ふ事になる。②武衛は義敏に法号がなく、三位入道とある期間は、出家した文明十七（一四八五）年七月⁽⁷⁸⁾から、永正五年（一五〇八）十一月の

没⁽⁷⁹⁾迄で、その子義良は、文明四年十二月元服⁽⁸⁰⁾、同十七年四月に左兵衛佐⁽⁸¹⁾とあり、この時義寛に改めた⁽⁸²⁾。

左兵衛佐 左兵衛佐 從三位左兵衛督 左馬頭
②義敏——義良——
三位入道 長春院殿 成氏

③鎌倉公方は、成氏が宝徳元年（一四四九）八月左馬頭⁽⁸³⁾に任じられ、その子政氏が明応六年（一四八九）に襲職する事とも矛盾しない。更に有力大名の最後の掲載人物を見るに、

(山名) (細川) (畠山) (畠山) (一色)
右衛門督 右京大夫 畠山右衛門佐 道忠 尾張守 修理大夫
④政豊 ⑤政元 ⑥義就——義 ⑦尚順 ⑧義直
宝珠院殿

④山名政豊が文明八年（一四七六）八月に右衛門督⁽⁸⁴⁾、明応八年（一四九八）正月没⁽⁸⁵⁾。

⑤細川政元が文明十八年（一四八六）七月に右京大夫に任⁽⁸⁶⁾、永正四年（一五〇七）六月没⁽⁸⁷⁾。

⑥畠山義就が延徳二年（一四九〇）十二月没⁽⁸⁸⁾、その子基家は、文明十七年（一四八五）八月に元服⁽⁸⁹⁾。延徳三年（一四九一）十二月の安堵状では基家と見える⁽⁹⁰⁾。明応八年正月の戦死記事にも基家とあり⁽⁹¹⁾、義豊を称した時期は不明だが、『不問物語』上「江州御動座事」⁽⁹²⁾には「義就ハ逝去有シカトモ次郎義豊相続シテ」とあるから、義豊が初名で、延徳三年十二月以前に基家に改名したと見るべきか。

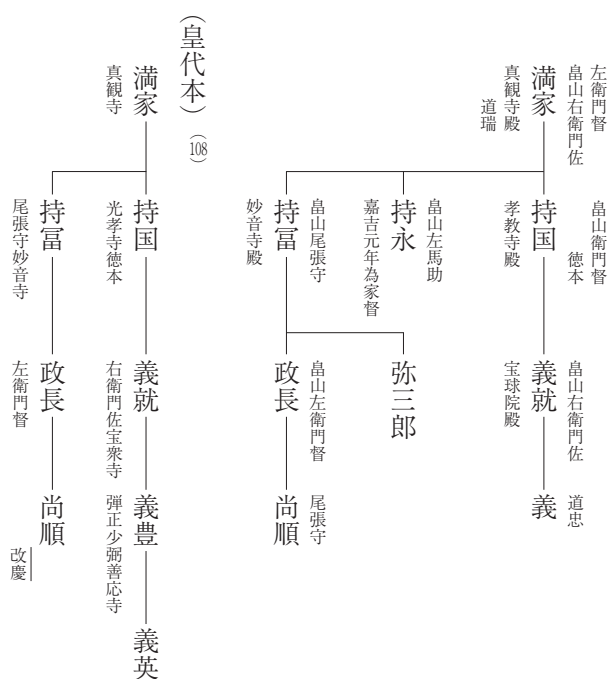
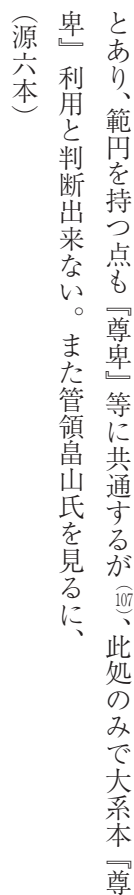
⑦同尚順が、文明十八年（一四八六）七月に尾張守⁽⁹³⁾で、大永二年（一二二二）七月没⁽⁹⁴⁾。

⑧一色義直は、長禄二年には「左京大夫」⁽⁹⁵⁾を称し、文明十一年八月にも現任⁽⁹⁶⁾、同十五年七月に修理大夫現任⁽⁹⁷⁾。明応九年五月以前に出家⁽⁹⁸⁾。

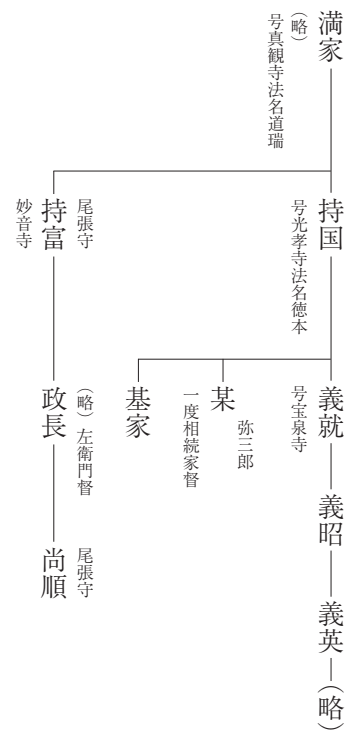
以上の大名の最後の掲載人物の記載からする成立時期は、①からす

四、源六本と清和源氏系図諸本との関係

以上の『尊卑』近似系図に特徴的に掲載されるのが、實在未確認の義朝子の義門である（¹⁰⁶）。



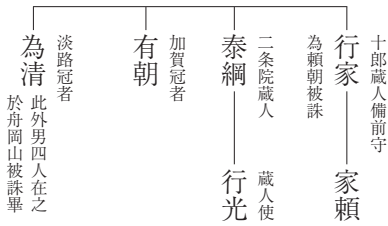
『諸家系図纂』所収『両畠山系図』（略記）



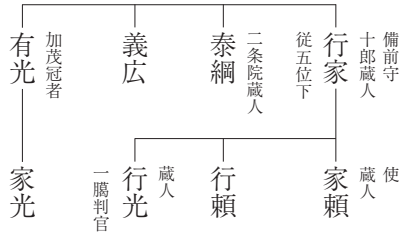
とあるが、弥三郎⁽¹⁰⁾を持つのは脇坂本『尊卑』・『両畠山系図』である。しかし脇坂本の持永脇書の「嘉吉元正廿九被仰付家督了」（『両畠山系図』同）の本文が源六本と一致しないことから見ても、当該箇所を見る限り、両系図の間に直接の関係があると判断出来ない。

それよりも管見に入つた系図との比較からすると、『尊卑』ではなく、『洪川』や菊亭本『系図略』系統の本と近似する箇所の有る事を指摘できる。清和源氏系図中、源氏為義末子の箇所に特徴的な人物を釣る一群の系図の有る事を指摘したが（拙稿⁽¹⁹⁾）

（源六本）



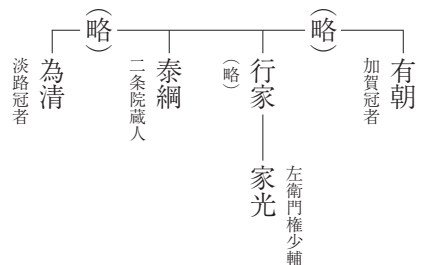
『洪川』



（久下本）

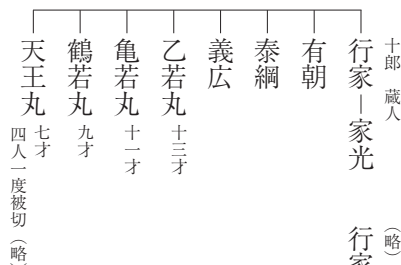


（浅羽本）

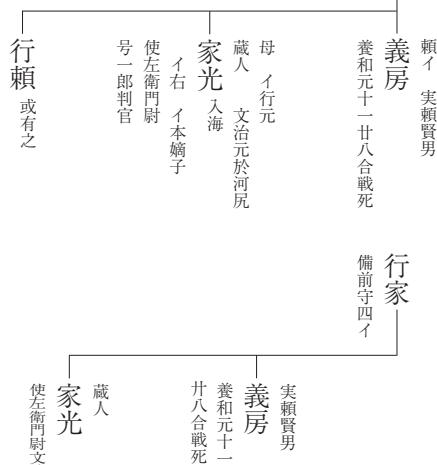


『諸家系図纂』「足利家将軍系図」⁽¹¹⁰⁾

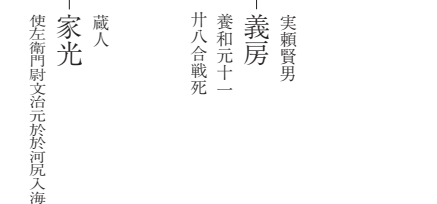
（下間本）⁽¹¹⁾



（北酒出本）

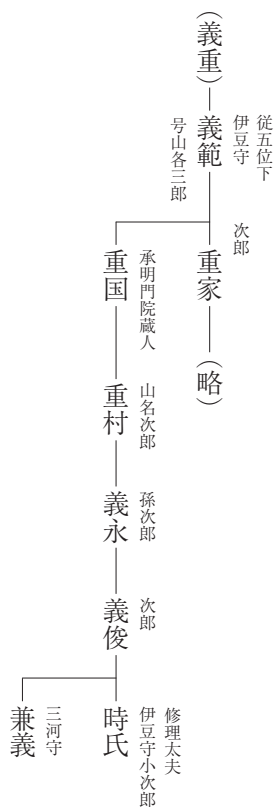


（御霊本）⁽¹²⁾



とあり、有朝・泰綱、何れも由来不明であるが、源六本・『洪川』・久下本・浅羽本・『足利家将軍系図』・下間本（・早大本）に共通する。しかし更に行家子の家頼を持つ点、共通するのが『洪川』である（但し有朝を加茂冠者有光とする）。

対して源六本の為清は『洪川』に無く、小城鍋島文庫本『平家物語』に、一六



(源六本)

從五位六条判官

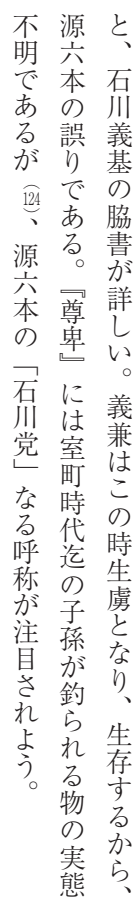
為義——(略)

五郎兵衛尉

義時

孫也云々

右兵衛尉
義時
河内源氏
義盛 (略)
從五位下
武藏權守
義基
八条院判官代
義兼 (略)
号石川判官



不明であるが⁽¹²⁴⁾、源六本の「石川党」なる呼称が注目されよう。

以上の独自記事は未確認であり、史料的价值が高いとは言えない訳であるが、『尊卑』との関係で注目すべき点がある。大系本『尊卑』は山名義

範と重国の間に、未確認の「義節」を挟むが⁽¹²⁵⁾、北酒出本・『洪川』や山名氏系図は義節を持たない。源六本も同様であり、大系本『尊卑』よりも

古態を保つ所であらう（拙稿⑭）。『尊卑』の問題点に、源為義を義親の実子とする事を指摘したが（拙稿⑫・⑬）、源六本には、その様な記述はな

い。又、義家末子の義時・義高の仮名を大系本『尊卑』は、それぞれ六郎・七郎とするが、『吾妻鏡』治承四年九月十七日条に義隆を「陸奥六郎義隆」

とする様に、義隆は六郎が正しい⁽¹²⁶⁾。佐竹本『尊卑』・菊大路本・林泉本⁽¹²⁷⁾も源六本と同じであり、共に大系本『尊卑』に比して正確である事

を指摘できる。

これは大系本『尊卑』の史料価値を改めて相対化する、源六本の価値である。

(1) ①「桓武平氏正盛流系図補輯(上)」(『国語国文』六十四ノ十二、

平成七年十二月)・「同(下)」(『同』六十五ノ一、同八年二月)以下、

拙稿①

②「桓武平氏正盛流系図補輯之落穂」（『米沢国文』二十五、平成八年十二月）以下、拙稿②。

- ③ 「池殿の末裔」(『国語国文』六十九ノ十、平成十二年十月) 以下、拙稿③。
 - ④ 「桓武平氏正盛流系図補輯之彦栄」(菊池靖彦教授追悼論集刊行会編『人・ことば・文学』所収、平成十四年十一月) 以下、拙稿④。
 - ⑤ 「平家系図雑考」(『米沢史学』十九、平成十五年十月) 以下、拙稿⑤。
 - ⑥ 「桓武平氏正盛流系図補輯之裏成」(『米沢史学』二十二、平成十八年六月) 以下、拙稿⑥。
 - ⑦ 「桓武平氏正盛流系図補輯之粉殻」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四十三、平成二十八年三月) 以下、拙稿⑦。
 - ⑧ 「架空平家一門伝」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四十九、令和四年三月)、以下拙稿⑧。
- (2)
- ① 「北酒出本『源氏系図』の史料的价值について」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』二十七、平成十二年三月) 以下、拙稿①。
 - ② 「溢れ源氏考証(上)」(『米沢国語国文』二十九、平成十二年六月)・「同(下)」(『米沢国語国文』三十三、平成十四年十二月) 以下、拙稿②。
 - ③ 「清音寺蔵本佐竹并源氏系図」所収石川氏系図二種について(『山形県立米沢女子短期大学紀要』三十五、平成十二年十二月) 以下、拙稿③。
 - ④ 「矢田判官代在名・大夫房覚明前歴」(『米沢史学』十七、平成十三年十月) 以下、拙稿④。
 - ⑤ 「義仲最期の周辺」(『米沢国語国文』三十三、平成十六年十二月) 以下、拙稿⑤。
 - ⑥ 「『平家物語』「墨俣合戦」考」(『山形県立米沢女子短期大学紀要』四十、平成十七年一月) 以下、拙稿⑥。
 - ⑦ 「長楽寺本『源氏系図』成立試論」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』三十三、平成十八年三月) 以下、拙稿⑦。
 - ⑧ 「信濃井上氏の成立と展開」(『山形県立米沢女子短期大学紀要』四十二、平成十九年一月) 以下、拙稿⑧。
 - ⑨ 「溢れ源氏考証補闕」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』三十四、平成十九年三月) 以下、拙稿⑨。
 - ⑩ 「頼朝流離時代困窮の虚実」(『米沢国語国文』三十七、平成二十年十二月) 以下、拙稿⑩。
 - ⑪ 「『平家物語』の中の佐竹氏記事について」(『山形県立米沢女子短期大学紀要』四十四、平成二十年一月) 以下、拙稿⑪。
 - ⑫ 「源義忠の暗殺と源義光」(『山形県立米沢女子短期大学紀要』四十五、平成二十一年十二月) 以下、拙稿⑫。
 - ⑬ 「『洪川系図』の成立とその史料的价值について(上)」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』三十七、平成二十二年三月)・「同(下)」(『同』三十八、同二十三年三月) 以下、拙稿⑬。
 - ⑭ 「新田義重伝雑々」(『山形県立米沢女子短期大学紀要』四十七、平成二十三年十二月) 以下、拙稿⑭。
 - ⑮ 「『洪川系図』伝本補遺、附土岐頼貞一族考証(上)」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』三十九、平成二十四年三月)・「同(下)」(『同』四十、同二十五年三月) 以下、拙稿⑮。
 - ⑯ 「辺境の源為朝伝」(『米沢国語国文』四十二、平成二十五年十一月) 以下、拙稿⑯。
 - ⑰ 「源為義義親実子説の成立時期について」(『山形県立米沢女子短期大学紀要』四十九、平成二十五年十二月) 以下、拙稿⑰。
 - ⑱ 「上杉博物館蔵林泉文庫旧蔵『源氏系図』の特徴について」(『山形県立米沢女子短期大学紀要』五十二、平成二十八年十二月) 以下、拙稿⑱。
 - ⑲ 「『尊卑分脈』近似室町後期写清和源氏系図について」(『山形県立

米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四十四、平成二十九年三月）以下、拙稿^{①⑨}。

②⑩ 「平安末期足利・新田氏考証補遺」（『山形県立米沢女子短期大学紀要』五十四、令和元年十二月）以下、拙稿^{②⑩}。

②⑪ 「菊大路本『清和源氏系図』覚書」（『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四十七、令和二年三月）以下、拙稿^{②⑪}。

②⑫ 「深栖氏系図再考」（『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四十八、令和三年三月）以下、拙稿^{②⑫}。

②⑬ 「賀茂次郎義綱最期異伝」（『米沢国語国文』五十一、令和五年二月）真名本（日光叢書）及び仮名本（続群書類従完成会）参照。

④ 「〔〕」は系図三より補。系図四・七によれば、傍線部は「元」、系図七に拠れば波線部は「清連」とある（系図四には該当人物が吊られない）。

⑤ 「後北条氏家臣団人名辞典」「おがさわら2」（平成十八年九月、以下、下山氏著）

⑥ 「天文五年高野山高室院月牌帳」（『寒川町史 十 別編（寺院）』）

⑦ 「戦国遺文 後北条氏編」四四〇一

⑧ 「室町家御内書案」「足利義晴御内書案写」（『戦国遺文 後北条氏編』四四一四・四四一五）

⑨ 長房は『徳川実紀』元和二年九月二十九日条、長真は『同』寛永十年六月九日条に破損奉行（新訂増補国史大系）。『寛政重修諸家譜』一九三「小笠原」参照（続群書類従会完成会翻刻本）。

⑩ 内閣文庫本の電子公開に拠る。

⑪ 『新編信濃史料叢書 十二』を参照。

⑫ 電子公開による。

⑬ 例外は宗盛の「右大将大納言」で、これは、覚一本巻二「徳大寺巖島詣」に見える（高野本〔武蔵野書院刊の影印〕）。元（基）盛の「安芸判官」は『保元物語』が淵源である（半井本巻上）〔官軍方々手分

ケノ事）』（坂詰力治氏他『半井本 保元物語 本文・校異・訓釈編』）。他系図では吉田本にも見える（拙稿^⑧参照）。

⑭ 汲古書院の影印による。

⑮ 山口新聞社刊の赤間神社本の影印による。

⑯ 「承久三年四年日次記」・『石清水皇年代記』「後堀河」承久三年七月二十八日条。前者は東大史料編纂所の謄写本、後者は『大日本古文書石清水文書之四』による。

⑰ 『兵範記』仁安元年十月十日条（増補史料大成）。

⑱ 都城市文化財調査報告書三〇『野辺・東条家文書』二〇番。以下『野辺』（番号）として掲載する。

⑲ 複製日本古典文学館刊の影印。

⑳ 国会図書館の電子公開による。

㉑ 後藤康宏氏『須磨寺笛之遺記』と『小枝の笛物語』をめぐって（『伝承文学研究』三十一、昭和六十年五月）の翻刻による。同系の『小枝の笛物語』も参照（『室町時代物語大成 五』所収）。

㉒ 龍谷本（龍谷大学善本叢書）・熱田真名本（尊経閣叢刊）同。

㉓ 東大史料編纂所の謄写本による。松雲本『平家』巻九付載系図でも、師盛は、忠房の次に釣られ、「十四 一谷討死」とある（『大東急記念文庫所蔵 古写古出版物文学総覧 軍記物語』）。

㉔ 勉誠社刊の慶長古活字本の影印。

㉕ 東大史料編纂所蔵『古系図集』（電子公開）・延慶本『平家』系図・『野辺』二〇・『同』二二「平氏・野辺氏系図」・『同』二三「平氏・野辺氏系図」同。文禄本『平家』では〔〕に兼盛が入る。

㉖ 汲古書院の影印による。

㉗ 妙本寺蔵『平家系図』（千葉県の歴史 史料編 中世二）・上杉本『平家けいつ』・書陵部蔵『源平系図』（四一五―二二〇）一軸同。後者では番号が付され、師盛には「六」とある（電子公開）。天理大学

図書館吉田文庫蔵『平氏系図』では〔〕に兼盛が入る（以下、吉田本系図。拙稿⑧参照）。『源威抄』巻末平家一門交名では波線なし（秋田県立図書館蔵の紙焼写真による）。

- (28) 井川定慶氏編『法然上人伝全集』所収。中井真孝氏は九巻伝を知恩院蔵『法然上人絵伝』よりも後出とし（『法然上人絵伝の研究』第二部第六章「『法然上人行状絵図』成立私考」・『九巻伝』取り込み説批判——第三部第一章「法然諸伝にみえる遊女教化譚」・『行状絵図』と『九巻伝』の前後関係・同第二章「『法然上人行状絵図』と『法然上人伝記』（九巻伝）」（平成二十五年九月）、文和五年（一三五六）が成立の上限であるとする（『同書』第二部第五章「『法然上人伝記』（九巻伝）の成立について」）。

- (29) 山口隼正氏「入来院家所蔵平氏系図について（上）」（『長崎大学教育学部社会学論叢』六十、平成十四年三月）

- (30) 『山槐記』治承三年六月四日条（増補史料大成）。

- (31) 『兵範記』仁安元年十一月十四日条。

- (32) 『兵範記』仁安二年正月二十八日条。

- (33) 『兵範記』仁安三年十月十八日条。

- (34) 『山槐記』安元元年九月十三日条。

- (35) 『玉葉』治承二年十二月十五日条。図書寮叢刊による。

- (36) 『玉葉』同前二十二日条。

- (37) 『玉葉』治承三年六月三日条。

- (38) 『玉葉』寿永二年四月二十一日条。

- (39) 『古系図集』・『尊卑』・野辺本二〇・文禄本系図・吉田本系図。

- (40) 『玉葉』安元元年十二月二十九日条。

- (41) 『玉葉』・『山槐記』治承二年正月五日条。

- (42) 『古記』養和元年四月十七日条。

- (43) 『山承記』養和元年十二月一日条（『歴代残欠日記 五』）。

- (44) 『玉葉』養和二年四月二十一日条。

- (45) 『古系図集』・『尊卑』・吉田本系図。野辺本二〇に「四」の残画あり。

- (46) 陽明文庫蔵『除目旧例』「任人一人除目例」（紙焼写真）に、
承安三年十二月卅日追儼次

丹後守平師盛景盛明年可秩満之故云々

とある。景盛は拙稿①参照。

- (47) 『禪中記』安元元年十一月九日条。書陵部蔵三条西家蔵本の電子公開による。『愚昧記』治承元年十一月八日条に丹後守現任（大日本古記録）。

- (48) 『玉葉』治承二年正月二十八日条。

- (49) 『玉葉』・『山槐記』治承三年十一月十五日条に補任記事がある。

- (50) 『玉葉』安元二年正月三十日条。

- (51) 『古記』元暦元年四月二十八日条。

- (52) 四部本・百二十句本・南都本共に汲古書院の影印。

- (53) 知恩院蔵『法然上人絵伝』巻四十五（『続日本の絵巻 三』）・『法水分流記』・西谷本『浄土惣系図』（共に『法然教団系譜選』所収）。

- (54) 伊藤祐晃氏『浄土宗の研究』第二章五「第二世勢観房源智上人」（昭和二十年九月）

- (55) 三田全信氏『浄土宗史の諸研究』八「勢観房源智について」（昭和三十四年一月）

- (56) 京都大学附属図書館菊亭文庫蔵『系図略』（以下、菊亭本『系図略』）・東大史料編纂所蔵徳大寺本『源氏系図』（徳大寺四七一五一一、徳大寺本と略）・京都歴彩館蔵『系図』（東坊城本と略）・『諸家大系図』巻四（家蔵本による。『大系図四』と略）も同。同系の内閣文庫蔵『葦名系図』は清経・有盛に母の注記がないが脱落であらう（紙焼写真）。『指宿文書』三〇「平姓指宿氏系図」（『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ十』）には小松殿公達に母の脇書なし。

- (57) 京都大学附属図書館蔵（紙焼写真による）。『諸家系図纂』二十七上「桓武平氏（清盛公流）」も同じ（続群書類従『尊卑分脈脱漏平氏』が同）。
- (58) 国立歴史民俗博物館蔵。紙焼写真による。
- (59) 天理大学図書館蔵吉田文庫蔵。
- (60) 京都大学附属図書館蔵平松本『平氏系図』同。書陵部蔵『源氏諸流系図』では傍線なし。
- (61) 藤原重雄・三島暁子氏「高松宮家旧蔵『定能卿記』（安元御賀記）」（『禁裏・公家文庫研究』二、平成十八年三月）
- (62) 徳川黎明会叢書『古筆聚成』の影印。群書類従本にも見える。
- (63) 『玉葉』同二十三日条には実教の重服の記事がある。
- (64) 『尊卑分脈』「末茂孫」・『公卿補任』仁安元年成親条（新訂増補国史大系）。
- (65) 清経の名は『玉葉』治承四年五月二十一日条、『警固中節会部類記』所収『山槐記』同十二月二日条（小川剛生氏「『警固中節会部類記』研究 附翻刻」〔『明月記研究』五、平成十二年十一月〕）に見える。
- (66) 『古記』寿永二年七月二十一日条。
- (67) 『山槐記』安元元年九月十三日条。
- (68) 『玉桂寺阿弥陀如来立像胎内文書報告書』（昭和五十六年三月）による。
- (69) 「『勢観房源智の親類紀氏について』（『三康文化研究所年報』十六・十七号、昭和五十八年三月）
- (70) 『浄土宗の成立と展開』第三章第一節「勢観房源智の勧進と念仏衆―玉桂寺阿弥陀仏像胎内文書をめぐって―」（昭和五十六年六月）
- (71) 手向山神社本『紀氏系図』（東大史料編纂所蔵謄写本）・国文学研究資料館蔵『石清水八幡宮祠官系図』（電子公開）・書陵部壬生本『紀氏系図』（電子公開）・尊経閣文庫蔵『紀氏系図』一巻参照（紙焼写真）。
- (72) 『後法興院記』・『親長卿記』・『言国卿記』・『拾芥記』四月二十八日条。
- 以下（103）まで、特に記さない場合、『大日本史料』所引の記事による。
- (73) 『大乘院寺社雑事記』長享元年正月十五日条・『蔭涼軒日録』同二十四日条。
- (74) 『長興宿祢記』長享元年九月一日条。
- (75) 『御湯殿上日記』延徳二年正月十三日条。
- (76) 『和長卿記』明応七年八月十九日条。
- (77) 『蔭涼軒日録』・『実隆公記』延徳三年正月七日条。
- (78) 『親元日記』文明十七年七月同八日条。
- (79) 『実隆公記』永正五年十一月二十二日条。
- (80) 『大乘院寺社雑事記』文明五年二月十五日条。
- (81) 『実隆公記』文明十七年四月七日条。
- (82) 『親元日記』文明十七年四月十六日条。
- (83) 『妹尾文書』「後花園院口宣案」（『戦国遺文 古河公方編』四）
- (84) 『歴名土代』文明八年同人条（続群書類従完成会刊行本）。
- (85) 『実隆公記』明応八年正月二十三日条・『後法興院記』同二十九日条。
- (86) 『長興宿祢記』・『政覚大僧正記』文明十八年七月二十五日条。
- (87) 『尚通公記』・『実隆公記』永正四年六月二十三日条・『宣胤卿記』同二十四日条。
- (88) 『尋尊大僧正記』延徳二年十二月二十九日・晦日条。
- (89) 『大乘院寺社雑事記』文明十七年八月六日条。
- (90) 『観心寺文書』二〇六「畠山基家禁制」（『大日本古文書』）。『後法興院記』明応三年十二月二十日条にも基家と見える。
- (91) 『大乘院寺社雑事記』明応八年二月二日条。
- (92) 和田英道氏「尊経閣文庫蔵『不問物語』翻刻」（『跡見学園女子大学紀要』二十九、昭和五十八年三月）に拠る。
- (93) 『後法興院記』文明十八年八月五日条。
- (94) 『経尋記』大永二年八月二十七日条。

- (95) 『長祿二年以来申次記』（群書類従）
- (96) 『雅久宿祢記』 文明十一年八月二十一日条。
- (97) 『実隆公記』 文明十五年七月十二日条。
- (98) 『下つふさ集』（私家集大成 中世 四）
- (99) 『尚通公記』・『宣胤卿記』・『守光卿記』 永正五年七月一日条。
- (100) 『実隆公記』・『拾芥記』 永正五年十二月二十七日条。
- (101) 『拾芥記』 永正十年十一月九日条。
- (102) 『拾芥記』 大永元年三月八日条。
- (103) 『二水記』 大永元年十二月二十五日条。
- (104) 『公卿補任』 同年同人条（新訂増補国史大系）。『足利家官位記』（群書類従）
- (105) 同系統の系図として、注（56）以外に『浅羽本系図』一「足利・土岐」（東大史料編纂所蔵謄写本、以下、浅羽本）・『清和源氏系図綱要』（『諸家系図纂』、以下、綱要本とする）・『久下文書』所収系図（東大史料編纂所蔵写真帳）がある。
- (106) 菊亭本『系図略』・浅羽本・綱要本。徳大寺本・東坊城本・『大系図四』は義円に「イ廉」とする。久下本は「義門」なし。
- (107) 『帝皇系図』・浅羽本・綱要本同。菊亭本『系図略』・徳大寺本・東坊城本・『大系図四』は範円・範暁を挙げる。久下本は「源智」と「範円」を挙げる。『尊卑』に近い菊大路本『清和源氏系図』は範暁とする（東大史料編纂所蔵写真帳）。以下菊大路本。
- (108) 大阪市立大学図書館森文庫蔵『公家武家小系図』は傍線なし（電子公開）。
- (109) 『大乘院寺社雜事記』 文明十二年十二月記後付系図。
- (110) 「以浅羽氏家蔵本写之」とあり、関東公方・平島公方の歴代を見るに江戸中期頃の成立か。淡路冠者義久、賀茂冠者頼次をも併せ持つ。
- (111) 竜谷大学図書館の電子公開による。早稲田大学図書館蔵『平治物語』
- 卷中付載系図（早稲田大学蔵資料影印叢書『軍記物語集』・仙台市博物館蔵『清和源氏系図』にも有朝・泰綱が見える（拙稿⑬）。
- (112) 御霊神社蔵『清和源氏系図』（東大史料編纂所蔵写真帳）
- (113) 汲古書院刊の影印による。中院本（三弥井書店刊）にも「こためよしかはつし、かものくわんしやためきよ、あはちのくはんしやためふ」（巻九「のと殿はうくてきたいちの事」と「ためきよ」が見える（相模女子大本同〔古典文庫〕）。
- (114) 拙稿⑭参照。
- (115) 徳大寺本・東坊城本・『大系図四』・内閣文庫本『諸家系図集』所収の八幡太郎義家より始まる義家流系図では「継」（拙稿「安日説話の展開―真名本『曾我物語』揺蕩―」（『国語国文』七十五ノ十二、平成十八年十二月）で内閣本『本朝皇胤紹運録』とした系図）。
- (116) 浅羽本・綱要本・久下本は頼高・阿野太郎に該当人物なし。
- (117) へに徳大寺本・東坊城本・『大系図四』・『諸家系図纂』「佐竹并武田」は「越後守」、「に久下本・『諸家系図纂』「佐竹并武田」は「泉三郎」。
- 「同」「甲斐信濃源氏綱要下」・「武田系図三篇」所収の浅羽本では、清俊が無い。
- (118) 御霊本は北酒出本とほぼ同。
- (119) 箱書に「佐竹義元公奉納 源氏系図」とある系図一帖。
- (120) 徳大寺本・東坊城本・綱要本・『大系図四』はへに越後守。
- (121) 北酒出本同。『帝皇』・佐竹本『尊卑』・清音寺本・長楽寺本系（長楽寺本・妙本寺本・島津本・内閣本『諸家系図集』所収本）・『故本佐竹家譜』「新田山名里見徳川分」（東大史料編纂所蔵謄写本）・長山家本『佐竹系図』は「高林四郎」。大系本『尊卑』・長楽寺本系（巻外本）・徳大寺本・東坊城本・『大系図四』は太郎。久下本は「伊賀守」とする。『古系図集』綱要本仮名なし。里見義冬本「里見冠者、大新田入道」（『諸家系図纂』、甲神社本は「里見太郎」、雑家系図所収「杖珠院本」は「大

新田里見太郎、又高林四郎」(東大史料編纂所謄写本)。新田義重子の仮名の異同については、拙稿⑦で考察した。

(122) 『佐竹系図纂』所収。東大史料編纂所蔵の謄写本による。

(123) 『尊卑』・菊亭本『系図略』・久下本・妙本寺本『源家系図』、宗鏡寺本・大明寺本・諸家系図纂本『山名系図』(前二者は東大史料編纂所の謄写本)。内閣文庫蔵『諸家系図』卷四十二所収本。久下本は「時俊」とする。

(124) 『東大寺文書』五八七―五〇八「石川義秀請文案」(大日本古文書)に石川七郎義秀が見える。

(125) 内閣本『諸系図集』の新田大炊助義重で始まる新田・山名系図。

(126) 陽明本『平治物語』卷上「待賢門の軍の事」(陽明叢書)も同。他の伝本も同。

(127) 上杉博物館蔵『源姓系図』。拙稿⑱参照。